

人類最強の英雄 ～神の
血筋じゃ無くても怪物
ぐらい倒せるよね～

刻神 翡翠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ZERO小説は多いのに雁夜おじさんの完全救済小説が少ないではないか

なら私の作成したオリ鯖（僕の考えた最強のサーヴァント）で完全に救済しようと作成した小説です

超不定期更新ですがよろしくお願いします

目次

雁夜伝説を呼び覚ます	1
第2話 雁夜とアルフエ、猫の正体	8
第3話 雁夜とウェイバー、大英雄と征服王	15
第4話 雁夜と聖杯戦争、セイヴァーの考え	23

雁夜伝説を呼び覚ます

ある男の話をしよう

人故に幸せを願ひ、誰よりも努力した男の話を

彼は神代のギリシャにて産まれ、その天性の運と人としての魅力で神に気に入られ、戦う力の第一歩を手に入れた

しかし彼は神より授かった武器だけでは満足しなかつた、これではまだ大切なものを守りきれないといい、飼ひ猫と旅に出た

初めてついた場所はバビロニアと呼ばれた場所、其処で彼は当時の王の出した難儀をいくつもこなした程度の強さとその地に伝わる神の弓を手に入れた

次についたのはインドと呼ばれる場所、彼は其処で師と呼べる人物に出会い、奥義を授かつた

さらに着いたのは北歐、彼の地にて主神とその兄弟により神の剣を手に入れ、ルーンと呼ばれるものを知り、それを習った

それからしばらく、彼は名も無き島に辿り着き2人の女神と1人の男神と出会った、男の神は軍神と呼ばれる存在だったが彼には敵わなかつた、女神達は月の祝福を得た首

飾りを彼に渡した

彼が最後に辿り着いたのは天界と呼ばれる地、聖書なる神話の神と対話し悪魔を打ちのめし神より生命樹の一部を杖として賜った

そして彼はギリシヤに戻り街で人々と幸せを紡いだ、時にはたわいない話をし、時に英雄の武器を鍛え、賑やかに過ごした・・・あの日までは

その日、ギリシヤの人々は震え絶望した、主神たるゼウスの滅ぼしたはずの怪物のテュポーンが蘇ったからだ、しかし彼は諦めなかつた、己の信念を貫き純粋な人にも関わらず怪物を討ち果たしたのだ・・・己の命を代償にして

怪物は最後の最後に彼を呪った、強力にて悪質な衰弱の呪い、さらに追い討ちをかけるがごとく街を幾万の龍や獣が襲ったのだ・・・しかしそれでも彼は立ち向かった

伝承に曰く、彼は大切な者を、己の故郷たる街を守る為に幾万もの龍や獣などに挑み街を背に全ての敵を滅ぼして立ったまま命を落としたと言う

彼が死にその直後、世界が悲しむかのように数日間雨が降り続いたそれは世界を一度飲み込み、殆どを滅ぼしたと言い伝えには残っている

怪物を滅ぼし、街を救った英雄、彼はヘラクレス、アキレウスと並びギリシヤの三大英雄として非常に幅広く知られている

かの者の名を

アルフェ

アルフェ・ルルーシャトーと言う

人類最強の英雄より抜粋

冬木市某所

「ぐつがあああつ!!?」

「全く、桜を救うのでは無かったのか、つまり奴じやのう」

苦しむ男をよそに年老いた翁は其処を去った

「うう、時臣いい、あグツ!!? 違うつ!!? 時臣は関係ない!!? 俺は、俺は桜ちゃんを…

救ってみせる!!?」

男はぐらつきながらも陰湿な地下を出て行く

「どうせ、召喚に失敗したら二度と見れないんだ、一度位はゆつくり街を見してみるのもい

いか」

男はゾンビのように崩れた顔を隠す為にマスクと深いフードを被り外に出る、辿り着いたのは柳洞寺と言われる寺、その階段の途中から街を見下ろす

「この街、こんな綺麗だったんだな…」

夜にも関わず美しい街を見て、ぽつりとそんな言葉が出て来た

にゃあ

声を聞き足元を見ると黒猫が居た、野生の猫だろうか、それにしても毛並みがいい
「つと今日はサーヴァント召喚の日なんだ、帰らなきゃな」

男は帰路に着く、猫はそのまま男を追いかける

「なんだ、ここまで着いてきたのか、やめた方がいいぞ、此処には動物や人間さえ喰う妖怪ジジイが居るんだ」

しかし猫は男の肩に乗り意地でもついて行くという意思をみせる、男は仕方なく猫を連れて地下に降りた

「なんじゃ、猫なんぞ連れて来おって」

「この猫が付いてくるって聞かなくてな、ジジイ始めるんだろ」

猫は翁を見ても興味すら湧かないと言う様に無視した、翁は眉を顰めそれでも時間が迫って居るので儀式を始める準備を始めた

「雁夜よ分かっているな？」

「ああ、俺みたいな半端者だとサーヴァントのステータスがかなり弱くなるから、呪文を加えるんだろ」

すると翁は男、雁夜の返答に満足した様ださつと魔方陣から退いてしまった

「さて、時間じゃな始めよ雁夜」

「ああ

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

祖には我が大師シユバインオーグ。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。
閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。

—————Anfang。

—————

—————

—————告げる。

——告げる。

汝の身は我が元に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我は常世全ての善と成る者。

我は常世全て悪を敷く者。

されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。

汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手操る者――。

汝三大の言霊を纏う七天。

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――！

雁夜は唱え終わると、すぐさま膝を着く

「グツガハツ!!? がああああアアア!!?」

時臣・・・悪いがお前なんかに構つてられるか!!? 俺が今、一番大切なのは桜ちゃんなんだ!!?

「桜、ちゃん、を救、うんだ・・・絶対に」

そう口にしただけでも活力が湧いてくる、まだ動ける

しかしそれは唐突に起こった

「む? なんじゃ!!?」

俺の足元に居た猫が陣に触れた瞬間、光がさらに集い、一つの人型を作り出した

「ふむ、妙な所に呼び出されたものだ、つと挨拶をしなければな、サーヴァント救済者、君の声に応えて参上した、問おう君が俺のマスターか?」

俺の呼び出したのは銀髪金眼の男だった、サーヴァントに真名を聞こうとして、体に入らずに倒れた

「む？マスター!??大丈夫・・・では無さそうだな、さて何処に運んだものか」

そんな呑気な声を聞き、俺は意識を手放した

俺はまだ知らなかったのだ、自分の呼び出した英霊が全サーヴァントトップクラスの
実力を持つなど、さらにはそのサーヴァントがコレから聖杯戦争の中心に立とうなどと
は、まだ欠片も考えて居なかったのだ

第2話 雁夜とアルフェ、猫の正体

目が開く、知ってる天井だ

「うぐつり!? 此処は、俺の部屋か?」

「ああ、そうだ、爺さんに聞いて連れて来させてもらったよ」

俺が声に驚き振り向くとそこには俺が呼び出したサーヴァントが居た、地下は暗く見えなかったが今ならよくわかる、救済者^{セイヴァー}を名乗るサーヴァントは上から下まで黒で統一された服を着て居た

「えっと、俺が呼び出したサーヴァント、でいいんだよね?」

「ああ、違くない、俺が君の呼び出したサーヴァントだ、ふむ自己紹介でもしないか? 俺は英霊と呼ばれているらしいが、感性は唯の人間だからな」

セイヴァーはそんな事をいいだした、まあ自己紹介はバーサーカーで無いと知った時からコミュニケーションの一步目として必要だからしようと思ってたんだ、予定が早まったと考えよう

「俺の名前は間桐 雁夜だ、聖杯戦争に参加した目的は桜ちゃんを救う事だ」

「ふむ、桜ちゃんとは家に居た少女の事か?」

なるほど、俺が倒れている間に接触して居たらしい、なら説明は簡単だ

「ああ、その子であつてる、俺はその子に魔術師としてでは無く、普通の女の子として幸せになつて欲しいんだ」

「ふふっ」

？

「何がおかしいんだ？」

「いや、実に人間らしいと思つてな、個人的に魔術師は嫌いだったんでね、これは思わぬ収穫だ」

魔術師が嫌い？何か生前に嫌な記憶でもあるのか？

「さて、俺の番か俺の名はアルフェ、アルフェ・ルルーシャトーだ、好きなものは肉、梨、魚とかだな、嫌いなものは魔術師、王族、トマトだな、まあ基本的にはセイヴァーと呼んでくれ」

「普通だな？？？トマト苦手なのか？？？つてアルフェ・ルルーシャトー？？？ギリシャの三大英雄の1人じゃ無いか？？？ほ、本当なのか？？？イタタ．．．」

俺はあまりのことにベットから飛び起きようとして、身体に走つた激痛に再び倒れた、そうだった俺は死にかけだったんだ

「マスター、あまり騒ぐと身体にさわるぞ？」

「いや、アルフェ・ルルーシャトーなんて名前が出てきたら時臣彼奴だつて飛び上がつて優雅とか欠片も無くなるだろ」

彼奴の家系のうっかりは知り合いはみんな知つてるからな、重要な事になればなるほどうっかりが酷くなるからな、うっかり味方に裏切られて死ななければいいが

「ああ、そうそう君が聖杯戦争に参加した理由が知りたいんだ詳しく、な？桜に関わる事は分かっているのだが」

「ああ、聞いてくれ、俺の聖杯戦争に参加した理由を・・・」

俺は臓硯から桜ちゃんに対して行われた非道な事やこれまでの経緯を話した

「なるほどな・・・それが君が聖杯戦争に参加した理由か」

あの爺さんはとんだ化け物だったわけだ・・・が、あの爺さんは何故そこまで不老不死にこだわるんだ？

「雁夜は何故あの爺さん、臓硯は何故不死を求めて居るか、知つて居るか？」

「理由？いや、聞いたこともないし、考えたこともないな・・・ところでなんでそんな事を？」

ああ、確かにマスターの言うとうり最初から外道だったかもしれない・・・だが

「ああいった輩には3つのパターンがあつてな？一つが雁夜の言う普通の外道、不死を

求めてどんなことでもやらかす一般的なタイプだ」

「ああ、映画とかにも出てくる奴だな」

コレには当てはまらない、何故なら雁夜を甦る必要も無ければ、今回の聖杯戦争に参加する意味も無いからだ

「次に死への恐怖で不死を求めるタイプ、このタイプは不死がなかなか実現しないと周りに危害を加え始める」

「あー、つまり焦って周りに八つ当たりしてるって事だな」

バツサリ言ったな雁夜

「最後に、何か目的があつてそれを目指すのには時間が足りず、不死を目指しその途中で魂が腐るタイプ、臓硯の様に魂を別の生物に移し替えると魂が劣化し腐りやすくなる」

「セイヴァー、お前はこのタイプだと、考えてるんだな」

おつとまさか雁夜に表情を読まれるとは、まだまだだな

「なんとなく、だかな似たような奴を見たことがあつてな」

「なるほど、ところでなんで俺がセイヴァーみたいな有名な英霊を呼べたか知らないか？」

雁夜・・・中々良いところに目を付けたな

「その理由は此奴だ」

俺が持ち上げた其奴を雁夜はマジマジと見て・・・？マークを浮かべた

「えっと、此奴つて俺が召喚前に会った猫か？やたら毛並みが良かった」

「ああ、俺の飼いだからな」

「そうか、アルフェ・ルルーシャトー程の英霊のペットなら・・・は？」

「待て待て待てえ!!？少なくとも数千年前のペットだよな!!？なんで生きてるんだよ!!？」

「ああ、それについては此奴が説明するから、ほれファイル説明してくれ」

セイヴァーがそう言うのと猫は床に降りて突然輝いた

「はい、今から説明いたします間桐 雁夜」

美少女がそこに居た、イメージとしては髪を結んでいないだぼだぼの黒いローブを着た大きめな凜ちゃんと言うのが正しいか

「えっ?」

「えっ?とは失礼ですな間桐 雁夜、猫が人になれておかしいですか?この国には猫又や化け猫と言う私と同じように人になれる猫が居たはずですが」

随分毒舌だなこの子、言ってることからしてさっきの猫だと思ふのだが

「ああ、失礼しました、私はマスターの飼い猫でシエフィールド・ニヤータと言います、

間桐 雁夜これからよろしくお願いします」

「・・・えつと、よ、よろしく?」

あまりの事に俺はかなり固まってから反応してしまった

「フィル、お前の容姿は目を引くからしばらくは桜の世話を頼むぞ」

「マスター、私の事を説明するんじゃないんですか?」

「・・・ソウダツタネ」

カタコトつて英霊つて非人間だと思つてたけどそうじゃなかったんだな

「ともかく、私が数千年生きて居る理由について説明します、簡単に言えば・・・

私が魔法使いだからです」

・・・魔法使い?

「魔法使いつてアレか、虫ジジイが言つてた世界に今は5人しか居ないとんでも無いことが出来る魔術師の上位職みたいな」

「まあ、間違つては居ませんが私は認知されてませんけどね、現在生きて居る?魔法使いはキシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグ、蒼崎 青子の他には私は知りません、また魔法には第6までの魔法がありますが私は第2、第3そして私だけの力、第7魔法を行使出来ませぬ」

は?

「待ってくれ、つまり君は不老不死なのか？」

「ええ、そうです故に私は数多の時を生きてきました、つまり聖杯が無くても私が居れば桜を救えます」

・・・マジか

「ええ、マジです、ついでに言えばあなたの体を治すことも可能です」

「なっ!? この体が治るのか!?」

虫に体を食わせて魔力を作り出している、この体が!?

「ええ、どうします? 直します? 私はどちらでも構いませんよ」

「字が違う気がするけど頼む」

「ともかく、雁夜には魔術は覚えてもらうがな、今日中に・・・」

何か不穏な言葉が聞こえた気が・・・

「始めるから横になって貰えますか間桐 雁夜」

「ああ、わかったけど間桐 雁夜ってフルネーム呼びはやめてくれないか、間桐の苗字は嫌いなんだ」

「ええ、わかりました雁夜」

彼女は微笑みながらそう答えた、中学生ほどの体ではあるが美しい顔立ち故に顔が熱くなる・・・欲情なんてしてないぞ、絶対に

第3話 雁夜とウエイバー、大英雄と征服王

「ひ、酷い目にあつた．．．死ぬかと思つた？いや、死ぬより辛かつたかも」

「すまんな雁夜、まさかファイルがあそこまでスパルタだとは思わなかつたんだ」

一夜漬けとはいえ、一流の魔術師くらいなら相手にできるんじゃないか

「さて、早くしないと夕飯を作れないぞ？今日は餃子だサクサク買物を進めないとな」

「ああ、わかつてるけど、俺たち聖杯戦争中なのにこんな事をして居ていいのか？」

なんだ、そんなことか

「夜にならなければ聖杯戦争は始まらないよ、神秘の秘匿だの面倒だからな．．．それにもし負けるとしても楽しく過ぎして負けたいだろ？」

「なるほど、確かに楽しく過ぎしたいなつとすいま、せ、ん．．．」

「おお、スマンスマン、ん？お前は．．．」

「まったくどうしたんだよ、ライ、ダー．．．れ、令呪!?!?」

ほー、ライダーね

「へえ、君がライダーか」

「ほほう、そう言うお前はセイパーでもランサーでもアーチャーでもなさそうだな」
適性はあるけどね

「ああ、今回はバーサーカークラスの代わりにエクストラクラス、セイヴァーとして参加している、よろしく頼むよライダー」

「なんじゃ、名前を申す度量もないのか？ならば余から名乗ろう、余は征服王イスカンダ
ルである！」

イスカンダル、か

「なるほどなアキレウスの小僧に憧れている英霊か」

「何？あのアキレウスを知っているとはギリシヤの英霊だな」

おっと

「しまったな、少し口が滑った」

「何を言う、わざと口を滑らせた、の間違いであろう」

へえ

「流石にバレたか、次からもう少しマシな口の滑らせかたを考えないと」

「おう、つと所でお主らは何をしにここに来たのだ」

ん？ああ

「晩飯の支度だ聖杯戦争は夜からだからな、体調は万全にしなきゃな」

「サーヴアントは別に食べ物を食べなくてもいいんだらう?」

ライダーのマスターか、魔術の才能は無いが別の方面に才能が特化しているな、面白いな将来が楽しみだ

「そうだな、だがサーヴアントはかつては生きて居た人間なんだぞ? 飯を食べたくなくなるものだからな、気分だよ気分、やる気が出るか出ないかだ」

そう言うのと納得したようではない様な微妙な顔をして引き下がった・・・が
「でもさつきエクストラクラスって僕たちの知らないことを言ってる居なかつたか?」

「ふむ、なら一緒にお茶でも如何かな? 軽く情報交換がしたくてね」

「ちよ!?? セイヴァー!?? な、何言ってるんだよ!?? ジジイはともかく桜ちゃんのご飯とかどうするのさ!??」

気にするのはそこか

「金のことなら気にするな、異空間にしまっておいた金塊とかをいくつか売り払ったからな、それにたまには外食って選択もあり、だろ?」

「セイヴァー・・・お前なんでもありだな、まあ桜ちゃんには元気になって欲しいから外食は賛成だが」

「ワハハッ、そりゃあいい案だのう、よし行くぞ小僧」

「ちよ!?? ちよ!?? ライダー!?? ま、ま、待てええ!??」

こうして俺たちはサーヴァント2人とマスター2人という異質な組み合わせで喫茶店へと向かうのであった

「む？アレはサーヴァント2機とマスター2人か、マスターどう致しますか？・・・了解しました」

影はセイヴァー達を見張る様に追いかけて行った

「で、セイヴァーは僕たちにエクストラクラスって奴のことを説明してくれるんだよな」
「ああ、まずエクストラクラスが何なのかと聞いたな、エクストラクラスは通常の7クラスに含まれない特殊なクラスを持つ者のことだ」

通常の7クラスが騎士、槍兵、弓兵、騎兵、魔術師、暗殺者、狂戦士だから確かに救済者なんてクラスは無いし・・・今までに前例でもあれば・・・

「あるぞ」

「心を読まないでくれ!!? ってあるのか!!?」

そんな馬鹿な!!? って何で知ってるんだよ!!? サーヴァントに聖杯から与えられる知識は最低限のことだろ!!?」

「まあ、落ち着こうウェイバー君? セイヴァーの無茶苦茶は今に始まったことじゃ無いから」

「いや、雁夜さん!!? 諦めないでください!!? 貴方がセイヴァーの手綱を握ってなかったら大変な事に……」

「幾ら何でも失礼じゃ無いか……俺は好き好んでものを壊したりしない、(常識は壊すかもしれないが……)」

「お主も中々に現代を満喫しておるな、それに城の調理人でなくともこれ程の料理が出てこようとは、やはり現代は素晴らしいな全くもって、実に征服しがいがある」

ライダーが世界征服しようと言いだしたら令呪を使っても辞めさせないと

「おっと、話がズレたな……でエクストラクラスの数なんだが、俺が把握して居るだけで聖杯戦争に不具合が生じた時に現れる裁定者^{ルーラー}、生粋の復讐者たる復讐者^{アウェンジャー}、盾の英霊たるシールド、様々なエゴの詰まった存在アルターエゴ、俺のクラスたる救済者^{セイヴァー}、また各世界的宗教の開祖などは覚醒者として扱われる」

「ほう、よくそんな事を知っておるな」

確かに、何で知ってるんだ? 今回の聖杯戦争は4回目、他の全てに出て居たとしても分かるはずがない、それにそこまでエクストラクラスが居たなら僕にだって知れた筈だ「俺は高ランクの千里眼のスキルを持っていてな……未来であろうと過去であろうと並行世界であろうと見えるんだよ」

「何だそれ!!? この先に起こることがみんなわかってるんだろ!!? ならこの聖杯戦争の

勝者も……」

「な、何だそれ!?? 俺も聞いてないぞ!??」

つてマスターにも教えてなかったのか!??

「……そこなんだがなあ、聖杯戦争の勝者や敗者に関係する人や物、後はマスターやサーヴァントの戦略に関しては聖杯側から見ると制限されている、その代わり過去の聖杯戦争の事は全く封じられていない、その過程でちよつと面倒なものを見てな……ライダー気をつけろ、この聖杯戦争何かがおかしい」

「ほう、お主ほどのサーヴァントがそう言うとはのう……肝に命じておこう、さて余は言うことがある」

は?ライダー? 一体何を

「我が軍門にくだらんか?」

「はああああ!??ら、ライダーな、何を!??」

「いや、あいにく王様とは生前からあまり相性が良くなってね、王族には面倒ごとをいくつもふっかけられたことがあるからやめておこう、それに……」

それに?

「マスターの、雁夜の願いを叶えたくなくなってしまったからな、あんたは嫌いじゃないよ……だけど今は君よりマスターの方が魅力的だね」

「セイヴァー……」

「ふむ、余の付け入る隙はない様じやな、さて坊主行くぞ」

「ら、ライダー!!? ちょ!!? 掴むなら腕にしてくれよ!!?」

僕はライダーにエリを捕まれ、セイヴァーとそのマスターとの邂逅は終わりを告げた

「全く、愉快的なコンビだったな、そうは思わないか雁夜?」

「ああ、聖杯戦争なのにこんな出会いがあるなんてな」

セイヴァーは微笑みながら俺にそう言った

「いや、聖杯戦争の中だからこそ、なのかもしれないよ雁夜、つと少し待つて居てくれ桜とファイルを連れてくる」

「つともう7時か確かに呼んでこないとな」

ふつと消える様に移動したセイヴァーが屋敷の方に居るのを感じる……全く非常識なサーヴァントだ、いやサーヴァントだから非常識なのかもしれないが

「あ、何食う?」

「頼むからもう少し常識的に生きてくれ、セイヴァー!!?」

「生きてないから、サーヴァントだし、まあマスターには元気になって欲しいから焼肉にするか」

って桜ちゃんたちはどうしたんだ!!?

「私たちは居ますよ?」

「雁夜叔父さんどうしたの?」

「このとうり、もう連れてきたが? (空間転移の魔術でだが)」

「さらつと凄まじい魔術使ったって言わなかったか? 魔力足りなかったんじや」

今の俺じゃあ倒れる、と思っただが

「ファイルに供給を頼んでな、自分だけなら無制限に跳べるんだが」

現代の魔術師に喧嘩売ってないか!!? いや神代もかもしれないけど

第4話 雁夜と聖杯戦争、セイヴアーの考え

俺たちが食事を終え間桐邸に帰って来るとセイヴアーは俺だけ呼び出し話を始めた

「さて、食事も済んだわけだし、先ほどライダーから教えてもらったことを話そう」

「いつの間にそんな会話してたんだよ!?!? 俺は聞いてなかったぞ!?!?」

一体いつの間に

「ん?ライダー達と頼んだものが来るまでたわい無い話をして居ただろ?その時にメモ帳とペンをだしてバレない様に話した、何やら付けられている気がしてな、アサシンの可能性を配慮したんだが・・・昨日雁夜が寝ている間にアーチャーに殺されたらしい」

「お前は何処のスパイ映画だ!?!? ってアサシンはもう脱落しているのか?」

なら、マスターへの暗殺は・・・

「いや、脱落して居ない」

「は?待ってくれアサシンはアーチャーに殺されたんだよな!?!?」

なら脱落したんじゃ

「アサシンのマスターは言峰 綺礼、アーチャーのマスターは遠坂 時臣だ、因みに2人

は師弟関係で言峰 綺礼が裏切って攻撃を仕掛けたが返り討ちにあった・・・」

「時臣のサーヴァントが・・・ん？師弟関係？」

おかしくないか？聖杯戦争に入った後に裏切ったなら時臣の呼んだサーヴァントの強さも知って居たはず・・・何かおかしい

「ほう、中々に頭が回るじゃないか雁夜、アレは多分偽装だな、脱落を偽装して情報収集に力を入れさせ、不確定要素を排除するための駒と俺は考えている」

「ああ、それなら辻褃が合う、けどどうやって脱落を回避したんだ？それに教会を騙すなんて出来るのか？聖杯戦争の監督役なんだろう？」

俺がそう問いかけるとセイヴァーはまるで悪戯の成功した子供の様にクスクスと笑いこう言った

「今回の監督役は言峰 璃正、言峰 綺礼の父だ、観たところ時臣の祖父と誓いを立てたらしくてな、聖堂教会も聖杯が贋作と理解し自分たちに関係のない望みを持つ遠坂陣営が聖杯を取ることを是としている、またアサシンとして呼ばれるハサンの中には百貌と呼ばれる100近い人格を要したハサンが居てなそのハサンならば分裂する宝具を持つて居てもおかしくは無いと言う結論に俺とライダーは至った」

「セイヴァーの千里眼の強力さには恐れ入るよ、それに俺もそこまでの情報があればその結論に至っただろうからな」

セイヴァーはするとふと倉庫が立ち並ぶ一角に目を向けた、そして指を動かすと水が現れスクリーンの様になってセイヴァーが目を向けた一角の映像が映し出された

「コレは、ランサーか？ 雰囲気からしてケルトの戦士だな、獲物は二本の槍、顔には女性に対する魅了の力があると観た」

「二本の槍を使うケルトの槍使い・・・女性に対する魅了・・・まさかファイアナ騎士団のデイルムツド・オデイナか!!？」

俺がそう言うときセイヴァーはニヤリと笑って

「ああ、俺も同じ様に思った、全く技術は歩く歩幅、構え方からして一流だが身体能力は速さに偏っているな、コレがああの子の後輩か・・・弱いな」

「あの子？ 一体誰だ？」

「私の師匠の一人です」

背後から声が聞こえ、顔を向けるとそこにはシエフィールドが居た

「名をスカサハ、影の国の女王にてデイルムツド・オデイナの先達、クローリンの師匠です、立场上私はクローリンの姉弟子になりますね、ふふ」

「なるほどあの子スカサハの・・・ってスカサハあ？？」

「雁夜、夜だからほどほどにな」

いや、スカサハなんてビックネームをだされたら誰だって・・・

「あれ？いや、そうでも無いのか？」

「なんだ雁夜、驚きすぎて感性が逝かれたか？」

「まあ雁夜は少々私たちの価値観に触れすぎて若干壊れてしまったのでしよう、それよりセイバーらしき人が接触しましたね、あら？この気配は・・・」

画面に金髪のセイバーらしき人が映し出されたのを見てファイルが少し戸惑ったような声をあげた

「ほう、あの剣は俺が星に頼まれて造った剣だな、今でも覚えている、あの剣が俺の最高傑作だった」

「星に頼まれた？ってあの剣の事を知っているのか？」

「はい、あの剣は世界で一番有名な聖剣ですから、マスターと同レベルの知名度を誇るブリテンの赤き竜、それが彼女らしいですね」

ブリテンの赤き竜？ってまさか彼女は・・・

「アーサー王だっけ言うのか？？」

「ああ、それは間違いない、あの剣を使える英霊は今のところ俺とアーサー王だけだからな、まあセイバークラスでも無ければ所持出来ないが」

「マスターは宝具を完全開放すれば戦争中一度のみ、かの聖剣を超える剣を作れるでしょう？」

なっ!?? エクスカリバークラスの剣が作れるのか!??

「まあな、それより事の成り行きを見守ろう、最悪私が出ればいいさ、ステータスを隠す宝具を持っているからな」

時は遡ってセイヴァーと別れた後のライダー陣営

「のう、坊主」

「なんだよ、ライダー難しそうな表情してさ」

僕はライダーが何故か難しそうな表情をしているので、理由を聞いた

「あのアキレウスを小僧呼ばわりできるサーヴァントがどのくらいいるかわかるか?」

「うーん、それこそ残りの大英雄かアキレウスを子供の頃から知っている英霊、もしくは

アキレウスより昔の英霊だな」

そう答えて僕はハツとなった

「つてことはアキレウスと同等の英霊の可能性が高いのか!??」

「ああ、だがどの英霊なのかの確証がない、そこをどうにかせねば奴に対しては警戒を解けん、それに・・・」

ライダーは何かを考えると先ほどより晴れやかな表情になりこちらを向いた

「まあ深く考えても仕方ないわい、む?この闘気はサーヴァントか!??よし行くぞ坊主

!!?」

「ら、ライダー!?? ちょ!??」

ライダーは僕を掴みいきなり戦車を召喚すると気配を感じた倉庫街に向かった

...

『この聖杯は悪に偏っているかもしれない、通常の聖杯を水とすればこの聖杯は致死性の毒の混ざった物だな』

ライダーの脳裏に最悪の展開を予想させながら

セイバーとランサーの決闘にライダー、征服王イスカンドルが参戦し、その声にアーチャーが姿を現した、が

「全く見ているのは分かっているぞ、出てきたらどうだ!」

「ライダー、何を言っている」

「確かに、見ているサーヴァントが居ます、アイリスフィール気を付けてください」

私はセイバーに言われて周囲への警戒を強める

「そんなに大声で叫ばなくても聴こえてる、イスカンドルよもう少しマシな呼び出し方は無かったのか?」

「ハハハ! 気にするなよセイヴァー、別に人が来るなどという事はないのだからな」

現れたのは銀の髪に金の眼、闇の様に黒いコートを纏ったサーヴァントだった、そしてライダーは何と言った!?? セイヴァー? まさか通常の7騎とは違うの!??

「さて、ライダーに先にクラスを言われてしまったが改めて自己紹介をしよう、俺はセイヴァー!!? 今回はエクストラクラスの救済者のサーヴァントとして呼ばれた」

「「「つ　!?　!?」」」

「ほう、中々に骨のある雑種が居るではないか」

彼が自身のクラスを名乗ると、圧倒的な威圧が私たちを襲ったのだ、その威圧にセイバー、ランサー、ライダーのマスター、私は息を呑んでしまったのだ

「雑種とは酷いなアーチャー、俺はあまり気にしないが・・・俺のマスターにその様な口を聞いてみる、魂の一片まで滅ぼしてやろう」

「フハハハハ! くだらん、貴様のマスターなど雑種で十分つ　!?　!?」

その瞬間アーチャーの立っていた街灯が弾け飛んだ、アーチャー自身は街灯から降りた様だが、あのサーヴァントのステータスは・・・

「なつ　!?　!?」

「アイリスフィール?」

そう、見えたステータスはこうだった

筋力C

耐久E

敏捷B+

魔力C

幸運D

宝具A+

「ステータスが低い？いえ違う、これは」

「ステータスが変わってる？！？昼間見た時と全く違う？！？」

「それは？！？ステータスを隠蔽できる宝具でしょうか？私さえあの一撃を見切る事は出来ませんでしたから相当なステータスだとは思うのですが」

そう、ライダーのマスターは昼間に見たと言っていたならその可能性が高い、すると端正な顔を怒りに歪ませたアーチャーが

「貴様、王たる俺に貴様らと同じ地を踏ませるとは・・・肉片一つ残さん！！？」

アーチャーがそう言うとアーチャーの周りに黄金の歪みが生まれ、そこから無数の宝具が顔を出した

「なっ？！？」「嘘でしょ？！」

「ほう（アレは私の創る宝具とは違うな、歪みが本体と見た）凄まじい光景なのだろうが、それがどうした？」

セイヴァーがそう言うのと、セイヴァーの周りにいくつも炎の渦が生まれ、幾つもの宝具が顔をだした

「アレも、全部宝具だ!?」

「何だとお!?? いかん、離れるぞ!」

「アイリスフィール! 捕まってください、少し離れます」

ライダーが戦車でその場を離れ、セイバーが私を抱えてその場を離れ、ランサーが私たちとは別方向に離脱すると、アーチャーとセイヴァーの宝具が激突し・・・

倉庫街が丸々吹き飛んだ

マスターやサーヴァントに怪我はなかったものの、倉庫街そのものを吹き飛ばした爆発の対応に言峰 璃正は胃を痛め、遠坂 時臣はアーチャーを呼んだのは間違えだったのではと思いはじめて居た

2夜目終了

脱落者 言峰 綺礼&アサシン陣営(擬装の可能性大)